◇　前　田　博　之　君

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員、登壇願います。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　13番、前田です。教育行政について２項目質問します。

まず初めに、全国学力・学習状況調査、学力テストによる白老町の状況について。

（１）、小学６年生と中学３年生の各教科の数値による平均正答率について。

（２）、学力テストの結果分析とその特徴及び課題について。

（３）、平成19年の調査開始以来の平均正答率の経年状況と学力の定着について。

（４）、児童生徒の基本的生活習慣、学習時間等の分析とその評価及び課題について。

（５）、学校質問調査状況と分析から見える児童生徒、教師の実像について。

（６）､児童生徒の学力向上を実現する白老町スタンダードの実践分析と学力向上の方向性について。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

〔教育長　安藤尚志君登壇〕

○教育長（安藤尚志君）　全国学力・学習状況調査による白老町の状況についてのご質問であります。

１項目めの小学６年生と中学３年生の各教科の数値による平均正答率についてであります。小学校６年生では、国語Ａ66.6、国語Ｂ52.6、算数Ａ68.3、算数Ｂ39.2の正答率であります。次に、中学校３年生でありますが、国語Ａ72.6、国語Ｂ62.9、数学Ａ56.5、数学Ｂ37.4の正答率となっております。

２項目めの学力テストの結果分析とその特徴及び課題についてであります。今年度は、小学校、中学校ともに全国平均を下回り、その差は昨年度よりも開いております。小学校では、国語Ａの話すこと、聞くこと領域で全国平均と同様の結果となりました。また、算数Ａ、Ｂともに例年よりも低い傾向にあり、全国、全道平均を大きく下回りました。算数の定着は、本町の大きな課題であります。中学校では、昨年度全国平均と同様であった国語が各領域において全国平均を下回りました。また、数学Ｂの資料の活用が全国平均を大きく下回るなど、数学全般についてその定着に課題が見られるものであります。

３項目めの平成19年の調査開始以来の平均正答率の経年状況と学力の定着についてであります。調査開始当初は、小学校、中学校ともに各学力調査において全国平均と比較して10ポイント前後の差がありました。しかし、平成23年度から実践しております白老町スタンダードの取り組み以降は、実施年度によって結果の上下はありながらも、徐々にその差を縮めております。

４項目めの基本的生活習慣、学習時間等の分析とその評価及び課題についてであります。基本的な生活習慣については、小学生、中学生ともに朝食の摂取、規則正しい就寝、起床時間についてほぼ全国平均程度、もしくはそれよりもよいという回答結果になっております。また、テレビやＤＶＤの視聴、テレビゲームやスマートフォンの使用など、本町児童生徒の電子メディアに触れる時間は小学生、中学生ともに全国平均よりも多い傾向にあります。平日の家庭で

の学習時間は、小学生は全国平均程度、中学生は少ない傾向にあります。これらのことから、本町児童生徒は電子メディアの使用と家庭での学習に課題があると考えております。

５項目めの学校質問調査状況と分析から見える児童生徒、教師の実像についてであります。学校質問紙調査は、自校の教育活動を校長が自己評価する形式で回答するものであります。学校質問紙は、学校サイドから見た児童生徒の実態や学校の取り組みを把握する調査の一つとして位置づけております。学校質問紙と児童生徒が回答する児童生徒質問紙では回答者や回答の視点が異なるため、学校が指導を行ったと考えていてもそのように受け取っていない児童生徒が一定の割合で存在する質問項目があります。道教委もそれを課題の一つとして挙げておりますが、本町においてもそのような質問項目が見られるものであります。例えば授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますかという質問に対して、当てはまると回答した児童は49.5％なのに対し、当てはまると回答した学校は75％となっております。教育委員会としましても、町全体の分析を進め、課題となる項目を学校に示し、検証と改善を図るよう指導するとともに、各学校において児童生徒質問紙や学校質問紙、そして学力調査を関連させて検証し、実態を的確に捉え、改善に向けて取り組んでいるところであります。

６項目めの白老町スタンダードの実践分析と学力向上の方向性についてであります。本町では、平成23年度から白老町スタンダードを策定し、町内全ての学校で授業の充実、家庭学習の充実、学習環境の充実に取り組んでまいりました。その結果でありますが、実践前の４年間では小学校国語Ａの全国差が平均してマイナス６ポイントなのに対して、実施後はマイナス３ポイントになっております。算数Ａはマイナス10ポイントがマイナス５ポイントに、また中学校数学Ｂではマイナス11ポイントがマイナス６ポイントになるなど、全ての調査で全国との差を縮めていることから、一定の成果があったものと考えております。白老町スタンダードの今後の方向性につきましては、学力向上の中核である授業改善を中心にその取り組みを展開してまいりたいと考えております。各学校の校内研修を充実させ、授業改善を加速し、児童生徒一人一人がわかった、できたの実感のある授業づくりを目指してまいります。また、教育委員会としましても、施策の見直しや改善を図り、学力向上に向けた取り組みを充実させてまいります。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ただいま学力テスト平均正答率が数値で答弁ありましたけれども、これについては評価したいと、こう思います。

それで、次にそれにかかわって数値の公表についてお聞きしたいと思います。町のホームページで公表されている白老町の学力テスト調査結果を見ますと、数値でなく図表にしてその欄や欄外に白老町の平均正答率の位置を星印で表示しています。正答率が何％になっているのかはわかりません。町民の方々からも、公表のあり方も含めて指摘があります。数値の公表を前提とした質問の要旨を前回理解いただいたかなと、こう思ったのですけれども、私の質問通告が不十分だったのか、公表について答弁ありませんでした。改めて伺いますけれども、教科の平均正答率について、今も話しましたけれども、数値で答弁がありました。これは公開と言ったほういいかな。それで、議会だけの答弁にとどめることなく、町として調査結果の数値を広

く町民に公表するということで理解してよろしいですか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今議員のほうから学力・学習状況調査の数値公表についてご質問がございました。

確かに本町のホームページでは表の中に全国平均の数値があり、その下に全道平均の数値があり、そして３段目に本町の枠がございますけれども、そこについては具体的に数字は入れておりません。ただ、下の横のグラフといいますか、そこには一応３刻みの目盛りで大体白老町がどの辺になるのかという位置をお示ししているところでございます。細かい0.何ポイントというところまではちょっと見えないと思いますが、おおよそのところについてはご理解いただけるものというふうに考えております。ただ、基本的にその数値というものは私は決して後ろ向きで考えてはおりません。ただ、ご承知のように、全国学力・学習状況調査ということの目的は、学習指導要領に定められている内容がどれぐらい子供たちに身についていて、そしてできていないものを具体的に各学校で指導改善に役立てるというのが本来の目的でございますので、その目的がずれないような形で公表してまいりたいと。それから、今管内的にもかなり数値目標ということが一般的になってきている状況もあるのかなというふうにも理解しております。この辺については、今後前向きに教育委員会の中で教育委員の皆さんともご相談しながら、本町の公表のあり方について検討してまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それでは、前向きということは、公表するという前提で捉えてよろしいですか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今年度についてはもう既に公表しておりますので、今年度のものを今また改めてホームページで訂正ということはなかなか現実的には難しいと思いますけれども、来年度に向けてその辺は十分他の自治体の様子見ながら、数値のほうについてはそのように取り扱ってまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ぜひよろしくお願いしたいと思います。それで、そうすると学力テストの平均正答率を数値で公表するということは、いろいろ議論ありますけれども、１つとすれば保護者に対する説明責任を果たすことにもなると、そして地域で学力向上に関する取り組みに対して関心や期待が高まると、こう思います。そういうことで、ぜひ来年度から公表していただきたいと、こう思います。

それで、学力テストの各教科の平均正答率の数値化は、ホームページや広報紙での公表、周知となりますか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　現在行っている公表については、今お話ございましたようにホーム

ページですとか、あと各学校の状況については道教委でレーダーチャートということで学力のバランスがどうなっているのかということを公表しておりますので、各学校の状況についてはそういったレーダーチャートを使いながら保護者の方に見ていただくと。いずれにしても、数字を公表することは私も議員と同じように異論のないところなのですけれども、数字だけがひとり歩きして、例えばいろんな他市町との比較も当然ございますし、学校現場からしてみると、まちによって学力のスタートラインが違うといいますか、そこのところが違うものですから、その辺のところも十分保護者の方にご理解いただいて、本当に地域一体となって保護者の方にもお力添えいただきながら学力向上に取り組んでいかなければなりませんので、そういう趣旨を十分踏まえながら公表してまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　具体的にこれから質問に入っていきたいと思いますけれども、今ちょっと学校の話出ました。それで、今市町村単位での公表は当然進んでいますけれども、学力テストの結果の公表について文科省は、今安藤教育長もそれを前提として言っていると思いますけれども、26年度の調査では目的を具体的に一定の配慮をしなさいと、こう言っています。そして、各自治体においてもそれぞれ判断で個々の学校名を明らかにし、調査結果の公表を行うことを可能としましたと、こう言っていますよね。そこで、うちの白老町では早目に議論しているのです。ということは、学校別の成績の公表については平成25年の12月会議で議論しているのです。その当時の教育長はこう言っています。学力テストの本来の目的は、小規模校が多い本町の実情から鑑みて、現段階での学校別の結果公表をする環境にはないと。だけれども、今後国の動向や保護者の意向を確認しながら公表のあり方を検討したいと、こう答弁しているのです。それで、今前向きに町単位は発表してくれるということなので、これ非常にいいことだと思います。ただ、学校別に、ちょっと今安藤教育長が答弁の端にありましたけれども、もう少し。では、前回こういう議論していますので、今白老町として学校別の公表についてはどういう考えでいるかだけお聞きしておきたいと思います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　前回の議会で前教育長が答弁したお答えと基本的には同じ考え方でおります。本町の場合は非常に小規模校が多くて、小規模校というのはその年、その年の結果の振り幅が非常に大きい状況がございます。ですから、本当に実態を知っていただいて、保護者が何ができるのか、地域がどんなサポートができるのかということを議論していただくことは大事だと思うのですけれども、その前提として学校間の序列ですとか、学校の理解の仕方によってはただ単に数値だけで、学校批判というものが起こりかねないという危険性もございますので、その辺については前回前教育長がお答えしたように、もう少し保護者の動向ですとか地域の状況を様子見ながら対応してまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それでは、具体的にちょっと伺います。今の答弁踏まえて、それはそ

れでわかりました。では、具体的に学校の中で、今回学力テストの数値公表になりましたけれども、その中で各学校職員に対して学力テストの結果についてどのような範囲まで公開して、どのように活用されているのかという部分についてお聞きします。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　公開というのは、保護者に対しての公開ということでございますか。

〔「学校の先生方に対して」と呼ぶ者あり〕

○教育長（安藤尚志君）　教職員は、全てこのデータは共有しております。ですから、自校の状況を、学力テストといいますとどうしても高学年の問題というような意識もややあるものですから、これは本町でも学力向上にかかわって白老町スタンダードというのを策定しておりますけれども、全教職員がそれぞれの学年から積み上げてきた結果が６年生の結果になっておりますので、この情報の共有については全ての教職員が数字で理解をしております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それで、児童生徒の個人への開示、それと保護者への公開と説明はどのように行われているのか、その辺伺います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　個々の情報についてはそれぞれ送られてまいりますので、学校のほうでは私が現場におりましたときはほかの子供たちの目に触れないように、一人一人に個票といいますか、データを封筒に入れてそれぞれ家庭のほうへお渡しして、それぞれの結果についてはお知らせしております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　当然保護者に伝わっていると思いますけれども、学力向上云々の学力テストの目的からいけば、保護者とも共有しなければいけないと思うのです。だから、保護者に対して個人的な部分については通ずると思うけれども、学校全体としてこういう傾向でこうあると情報共有して、それをどうステップするかという部分のそういう説明会は保護者には白老町では行っていないのかどうか、その辺です。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　まず、いろんな学年、学級のそれぞれのお便り、あるいは学校だよりでの周知はございます。それ以外、結果の説明というよりも、年度初めにＰＴＡ総会とか、そういう場面を使いながら、学校長がことし１年間子供たちの学力を高めるためにこういうような教育活動を行いますということでの説明といいますか、それは行っておりますけれども、終わった後の結果について、一度また保護者の方に集まっていただいて口頭でこういう結果でしたというような報告的な意味合いでの場は特に現在は行っておりません。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ちょっと大きい視点です。次に、教育施策についてちょっと伺います。

今議論していますけれども、この学力テストは19年度から実施して、ことしで10年になります。こういうことも踏まえて、平成27年４月に地方教育行政法が改正されて、教育委員長と教育長が一本化、教育行政の基本方針である大綱の策定、そして総合教育会議の新設などを通して新教育行政に対する首長の権限を強めた新教育委員会制度がスタートしましたよね。それで、新たな教育制度によって、白老町の教育政策やその推進に当たって教育行政や教育現場が従来と比べて何が変わりましたか、何か変わったものありますか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　教育活動や学校経営で具体的に、新教育委員会制度になったので、急に何かが変わったということは特にないと思います。特に変わったといえば、私自身もそうなのですが、教育長の置かれている立場が教育委員長と一本化になったということで、一義的に責任が非常に多くなったという意味では私自身が大変重く受けとめておりますけれども、制度の改正によって日々の教育活動で何か変わったとかということは多分ないのではないかというふうに理解しております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　次に、総合教育会議についてです。これ町長部局に入りますけれども、今28年度の学力調査の結果数値を参酌しますと、今年度は非常に厳しい状況にありますけれども、総合教育会議はご承知のとおり教育行政の大綱の策定や教育の条件整備等を重点的に講ずる施策等について協議、調整する場となっています。この始めてとなる会議が平成27年６月に開催されて、３回の会議で白老町教育推進基本方針を策定しています。それで、この教育推進基本方針策定以外でこれまで総合教育会議が何回開催されて、どのようなことが協議されていますか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　会議自体は今年度開催して、年に１回程度でございます。それとあと、具体的にはこの会議はいじめ対策にかかわる会議も兼ねておりますので、町長部局のほうと教育全般にわたる施策、それからあと町内におけるいじめの状況、このあたりを情報交流をさせていただいております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　これは、当初町長は総合教育会議を年２回程度開催すると、こういうふうになっていますよね。最後の会議がことしの７月７日で終わっているのです。ですから、今言うように学力テストの関係についても、学力向上策について協議できることになっていますから、ぜひこれ共有したほういいと思います。

そこで、次に全国学力テストの調査結果について具体的に伺っていきたいと思います。先ほども話ししましたけれども、白老町の学力テストの各教科の平均正答率の公表はパーセンテージでありません。そういうことを踏まえて、この図表を見ると、さっきも答弁ありましたけれども、平均正答率はここに属していると、こうなっているのですから、わかりません。それは

いいのです。もう議論しましたから。そこで、数値化していませんので、私はここまでくるまで全国、全道、胆振あるいは東胆振、これの平均正答率を基準にして本町の児童生徒の正答率がどういうポイントにあるかということわからないのです。そこで、きょう数値の答弁ありましたので、全国と白老町の正答率のポイントで各教科の比較推移はどうなっているのかお聞きします。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　私のほうから学力状況調査の過去３年間の推移について……

〔「28年度で結構です」と呼ぶ者あり〕

○学校教育課長（岩本寿彦君）　それでは、28年度の今回の結果について。まず、小学校の国語Ａでございます。全国平均と比較しましてマイナス6.3、北海道、全道平均といたしましてはマイナス4.4。それと、国語Ｂです。国語Ｂのほうにつきましては、全国平均との差がマイナス5.2、全道との差といたしましてはマイナス3.4。それと、算数Ａでございますが、全国平均との差がマイナス9.3、全道平均がマイナス７。それと、算数Ｂでございます。全国平均との差がマイナス８、全道平均がマイナス5.3という差となっております。続きまして、中学校のほうの状況でございます。まず、国語Ａです。国語Ａが全国平均でマイナス３、全道平均がマイナス2.5。次に、国語Ｂでございますが、全国平均との差がマイナス3.6、全道平均がマイナス2.1。続きまして、数学Ａです。全国平均との差がマイナス5.7、全道平均との差がマイナス5.3。それと、数学Ｂでございますが、全国平均との差がマイナス6.7、全道平均との差がマイナス5.9となってございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　非常に数字的には厳しい状況にあるということだけは認識しておきたいと思います。

　それで、一例を挙げてお聞きしますけれども、今答弁あったように小学校６年生で例えて話しますけれども、小学校６年生の算数Ａです。今差が答弁ありました。それで、全国との開きが9.3です。これ調べたら、厚真で見ると17.5も開いているのです。厚真はこの前新聞発表になりましたよね。比較云々ではなくて、事実としてあります。そうなると、平均正答率は、多分ご承知だと思いますけれども、各学校の成績が平均になっているので、各学校によってばらつきがありますよね。そうすると、これから見ると、白老町の今言った小６の算数Ａでも全国平均を上回っている学校、全国平均に近い位置にある学校、そして点数の低い学校。多分点数のばらつきがあると思うのですよ、私その中身までは見ていませんが。その結果が平均正答率になってくるのです。それで、今言ったように平成28年度は全ての教科で厳しいとありますけれども、27年度を見るとよい結果になっています。これは、努力の結果だと思います。いいところはいいところと言いますけれども、そこで伺いますけれども、28年度の小学校算数Ａのこの大きな差の結果分析と、各学校で今言ったようにそれぞれ差がありますけれども、各学校での認識、それと具体的な学力向上に向けた対策、そして児童に向けて個別指導はどのようにやっているか、この一つの例として具体的にお聞きします。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　まず、私のほうから算数Ａのテストの中で具体的にどういった問題の正答率が悪かったのかということをお話しさせていただきます。

今回本町の場合算数Ａの中では、まず単位ですとか量に対しての単位、量当たりの大きさの求め方を理解しているかというような問題、それと除数が１より小さいとき商が被除数より大きくなることを理解しているかという問題、それと１を超える割合を百分率であらわす場合において基準量と比較量の関係を理解しているかというような、この３つの問題が特に正答率が悪かったという状況でございます。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　どの教科のテストもそうなのですけれども、終わった後に各学校では、結果が送られてまいりますと１問１問自分の学校の正答率が何％なのかというチェックを行います。その中で、例えば10％全国との開きがあるというのは、やはりその学校の課題ですので、そのことについては本当に数日で分析を終えて、その後その課題を６年生だけの子供ではなくて全部の学年で、うちの学校としては算数なら算数の例えば計算が弱いということであれば、その時点から各学年で一斉にそこを重点的に指導していく、いわゆるＰＤＣＡというサイクルなのですけれども、それに取り組んでまいります。教育委員会としても、各学校は各学校で自校の分析をいたしますけれども、教育委員会は町全体としての傾向、これは一定限そういう傾向が見られますので、教育委員会としての分析、そしてそれをまた各学校へ情報提供しながら、お互いに子供たちの今の学力の状況、何が足りないのか、どこを指導すればいいのかというところを明確にしていくというか、明らかにしていく。その作業を通して、次年度また子供たちが同じところで間違わないような繰り返しの指導をしていくというような一連の作業を行っております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　これから質問することを安藤教育長は十分に私以上に理解していると思いますけれども、それで今答弁ありましたけれども、子供の学力を支えるのは教師の授業力であると、こう言われています。そこで、どんなに学校内で先生方が努力しても、児童生徒が家庭学習する習慣がなければ、非常に成績の向上は難しいと、これはやっぱり事実だと、こう思います。それで、学校だけでは学力向上のよい方策を見出すことが難しいこともあります。今若干答弁ありましたけれども。そこで、教育委員会が学力向上のための具体的な方策や改善策、そしてそれに向けた白老町スタンダードの実践、これについて各学校の実態を踏まえて支援する必要あります。今教育長からも若干答弁ありました。そこで、もう一度伺いますけれども、そうすると教育委員会としてのその取り組みの実態、支援策、これどのようになっていて、言葉ではわかるのだけれども、教育委員会としてこれがどういうシステムの中でされて、学校に効果を生むような形でいっているのか、その辺を伺いたいと思います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今議員からお話ございましたように、学力向上ということの一つの

結果を出していくためには、まずは日々子供たちと向き合う教職員がきちんとした指導ができるということが私は一番大事だと思っています。ですから、そこのところは決して緩めないで、これまでもそうでしたが、これからも教職員の資質向上については取り組んでまいりたいというふうに考えております。

ただ、これだけでは学力が上がらないというご指摘がございましたように、やはり家庭ですとか地域の方々のお力をどんなふうにおかりするかというところも大変私は大事なところだなというふうに考えております。白老町スタンダードにおいても、学習環境の中で、１つにはやっぱり学校の環境もありますけれども、家庭や地域の環境というような捉え方もしておりますので、そういった方々にいろんな場面を通して広報を通しながら、子供たちへの理解をしていただくということ、それもとても大事だと思っています。また、現実的に今学力向上に向けて２名ほど職員を配置して、先ほど本町の課題である算数の学力向上に向けて取り組んでいるところでございます。また、次年度に向けては、３年生ぐらいから、できれば町として子供たちの学力向上にかかわる調査を行ってみたいなというふうに考えております。現在は保護者の方々が負担されていて、それぞれ学校によっていろんな会社のデータを持っているのですけれども、白老町として共通の資料がないものですから、その辺は同じような基準で子供たちの学力を把握して、そして一斉に町内全体の取り組みを加速させていくという意味で、少し教育委員会が主導になって子供たちの学力調査というものについても取り組んでみたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　今教育長から、町として学力調査する。非常に大事なことで、私も質問しようと思ったのです。ということは、全国の学力調査だけでは白老町の現状の学力とか環境がどうだということはわからないと思うのです。それによって全体が、町が独自で調査することによって、分析することによってより進んでいくのかなと。よその町村では専門のそういう業者に委託までいかないけれども、問題集つくってやっていますので、これは町長、予算でもつけてぜひやっていただきたいなと思いまして、本当にいい前向きな答弁いただきましてありがとうございます。

これから質問するのはちょっと厳しくなりますけれども、それでも具体的に。それで、28年度の学習状況調査、児童の分の質問状況についてですけれども、具体的に聞きますけれども、学習習慣です。小学校で見ると、宿題しているは全国平均より6.2％下回っているのです。だけれども、ふだん、これ月曜日から金曜日です。学校外で１時間以上勉強するは、白老町は64.2％で全国を1.7％上回っています。家で自分で計画を立てて勉強しているは、12.7％上回っています。学校の授業の予習をしているかが5.3％上回っています。特徴的なのは、家で学校の授業の復習をしている。これ51.4％なのです、白老は。全国の23.5％を実に27.9％上回っています。相対的に白老町の児童らは、家庭学習時間は全国平均より多くなっているのですよ、調査でいけば。ですけれども、にもかかわらず学力テストの平均正答率は全科目で低くなっているのです。ということは、家庭学習の内容もあろうかと思いますけれども、成績につながっていない

という面も見受けられます。この辺非常に大事なところかと思うのですけれども、この点についてどのように考察されていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　ただいまの家庭学習の関係でございます。今回のテストと同時に質問もしてございますが、その中で小学校では、１時間以上家庭学習をしているというような回答をした児童の国語Ａ、Ｂ、算数Ａ、Ｂの４教科につきましては、正答率が非常に高いです。反面、１時間未満と回答した方、それと全くしないと回答した児童につきましては、やはり正答率が低いという状況になってございます。これは、中学校でも同じようなことでデータとしてしっかり出ております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　これを踏まえて町としてどういう見解を持っているか。実績分析ではなくて考察ですから、その辺です。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　本町の学力がちょっと伸び悩んでいる一つの状況として、下位層の子供たちの人数が非常に多いというのも１つ、点数がなかなか伸びていかない部分だと思います。ですから、例えばさっきご指摘ございましたけれども、１時間以上勉強しているという子供たちは確かに64.2％で、これは全国平均よりも高いのです。だけれども、それ以外に例えば勉強しないという子も実は全国よりも多いのです。ですから、その辺のところが学力の二極化といいますか、やる子はやるのだけれども、やらない子はなかなか学習に向かっていけないという状況がございまして、そこの部分の底上げといいますか、そういった子供たちにどうやって意欲を持たせて学習に立ち向かわせていくのかというところは全ての学校で今直面している課題だというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　私言っているのは、全国学力テストの平均正答率の比較云々一辺倒の質問でありませんので。ということは、学力テストの点数をとるための対策ではなくて、学力全体を底上げすると、これが結果的に学力テストの点数も上がると、そういう部分の考えで質問しているので、その辺を含めて答弁をお願いしたいなと思っています。

そこで、今教育長からもお話ありましたけれども、家庭学習についてです。子供の学力を伸ばすのは学校と家庭の連携にあると、こう言われています。これは、秋田でもかなり集中的にやっているみたいです。それで、学力向上に向けて学校、家庭、地域で取り組まなければならないのは言うまでもありませんけれども、先ほど言った子供の学力向上においては家庭が重要な鍵となると。教育長も先ほど答弁ありました。そこで、学校の取り組みの中で大事なことは、学校が家庭学習指導に力を入れなければいけないのだけれども、家庭学習の指導が学力につながると、同じこと今言っていますけれども、これについて、そこで学習意欲が生まれてくると。だから、僕言いたいのは学校だけに任せておけないと。先ほども言いました。もう一回念押し

ますけれども、そこで学校だけに任せませんと。そうすると、出番として教育委員会として家庭と学校の連携についてある程度の方策とか改善策、ある程度今回の分析もして、今教育長から答弁ありましたけれども、そういうのも踏まえて、それを教育委員会として改善に取り組んで、それらが具体的に家庭や学校にいかなければいけないと思うのですけれども、その辺の取り組み方についてはどうされていますか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　教育委員会としては、本当に表面的なことしかできないと思うのですけれども、いろんな冊子あるいは場面を通して、家庭学習の重要性であったり、子供への関心を持っていただくような、そういう啓蒙を教育委員会としては中心に行っています。あと、学校のほうは、具体的に家庭学習の手引のようなもの、マニュアルみたいなものをそれぞれつくって、そしてあと子供たちが家庭学習に向かえるような環境づくりしておりますので、教育委員会としては具体的ないろんな場面通して、学力向上ばかりではなくて、例えばアウトメディアにかかわる講話というのでしょうか、研修会というのでしょうか、あと町Ｐ連ですとか、そういった場面で家庭では具体的に親が勉強をどう教えるかということではなくて、子供たちが学習に向かえる環境づくりでありますとか、そういったことを考えたときに、先ほどもお話ございましたけれども、スマートフォンの使用時間ですとか、そういったことについてももっと保護者の方にも関心を持っていただく、あるいはその危険性についても理解していただく、そういうような場面を数多く持つようにはしております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　秋田県の部分で非常に注目浴びています。私もいろいろな本とかデータ読んできたのですけれども、それは別として、それから見て一言言えるのは、秋田県の学力向上の大きな要因はやっぱり規則正しい生活習慣と家庭学習にあるのでないかと。当然先生方の努力もあることは前提ですと言われています。そこで、古俣副町長あるいは安藤教育長、秋田県のほうに視察に行っていると思います。それで、先般の新聞でも安藤教育長のほうで、白老の学校の先生が秋田を視察していると。非常にいいことだと思いますけれども、そこで視察に行ってきた状況について、もし特徴的なもの、あるいは白老町で参考になるもの、あるいは教育長として、町としてこういうものはぜひ取り入れたいと、そういう部分がありましたら、秋田での教育はどうだったか、ちょっとここでお話ししていただけませんか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　ことし本町の教職員、各学校１名、秋田の能代市の視察をさせていただきました。その中で、今議員からお話ございましたけれども、私は今学校の先生方、教職員は、こういうような授業づくりが大事だといういわゆる理論的な部分については十分理解しているというふうに考えています。ただ、私もそうなのですが、お手本になるもの、モデルになるものを実際に見ることによってその理解はより一層進むのだろうなというふうに思っております。ですから、そういう意味でことし各学校から代表の先生方が秋田の能代へ行って、日々秋田で行われている授業に実際触れてみた。そして、そこでいろんなことを今回感じて帰って

まいりました。参加した教職員も帰ってきた次の日から自分たちでこういうような実践をしているというような報告も各学校から聞いております。ですから、そういった意味では先進地に実際教職員が行って、そこで空気を感じるというか、とってもそれは大事なことだなというふうに思っております。また、ことし年明けて１月には今度実際能代のほうからも先生に来ていただいて、行けない教職員たくさんいましたので、町内の学校の体育館を使って、模擬授業といいますか、全部の教職員が参加して、秋田の授業を全員で参観するというような企画も計画しております。

〔「教育長行ってきた感想は」と呼ぶ者あり〕

○教育長（安藤尚志君）　古俣副町長もいらっしゃいますけれども、私がお邪魔したのはもう６年ぐらい前ですけれども、一番感じたのは学校の環境でした。北海道と違うなと思ったのは、学校に入った瞬間に子供たちの学ぶ場なのだなということを感じたのです。それは、いろんな掲示物であったり、もちろん校舎の部分ありますけれども、先生方のふだんの授業に対する言葉遣いであったり、ですから環境が人をつくると言いますけれども、そこの部分に関しては一番私が秋田へ行かせていただいて感じたところです。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ぜひそういう事例を参考にして、意欲を持って学力向上に努めていただきたいと、こう思います。

それで、次に基本的な生活習慣に入りますけれども、先ほど若干の答弁ありましたけれども、具体的に聞きたいと思いますけれども、学校質問調査で、調査対象学年の児童は授業中の私語が少なく、落ちついていると思いますかと、こうあります。そのとおりだと思うと回答している割合が、白老ですよ、白老町内の小学校で50％、中学校が100％になっているのです。そして、礼儀正しいと思いますかでは、そのとおりだと思うのが回答が小学校で75％、中学校でこれも100％なのです。特にこの数字から見ると、中学校での学習規律と生活規律が徹底されているのかなと、こう思うのですけれども、中学校においてこの調査結果は学習態度や日常の生活の中での実態が本当に反映されているのだろうか。それで、この数字をうのみにしていいのかどうか、その辺ちょっとお聞きしたいのですけれども。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今お話ございましたように、子供たちが自己評価しているのですけれども、自己評価というのは子供たちの捉え方によって随分数字は動いていくのではないかなというふうに思っています。ですから、その辺のところで100％だからいいとか、何％がだめだというのでなくて、そこのところは多分比較的自己評価の甘い学年だったのかもしれません、そういう意味では。でも、子供たちがそういう前向きに捉えているところは非常に評価してあげたいなと思うのですけれども、これを実態とするかどうかという部分については、各学校の何よりも担任の見取りといいますか、そこの部分が私は一番大事ではないかなと。担任が子供たちの実態をどんなふうに捉えているのかということと、あと子供たちが自分たちをどんなふうに理解しているのかというところが、どういうところで折り合いをつけていくのかというと

ころが大事かなというふうには理解しております。

○議長（山本浩平君）　ここで暫時休憩をいたします。

休憩　午前１１時００分

再開　午前１１時１０分

○議長（山本浩平君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

安藤教育長のほうから、まず答弁の追加と訂正があるということでございますので、それを許可いたします。

安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　先ほど議員のほうからご質問ございました授業中の私語が少なく、落ちついているか、100％と、それから礼儀正しいと思うか、100％についての答弁でございます。

これは、学校質問紙調査ということでございますので、回答しているのは校長が回答しております。ですから、町内は中学校２校しかございませんので、２人の校長がそう思うと答えると100％になってしまうと。ですから、１人が違うと答えると50％ということで、数字としては100％で全道、全国をはるかに上回っているように見えるのですけれども、実際回答者数が２人しかおりませんので、ちょっとその辺のところは読み取るといっても、なかなかここの解釈は難しいかなというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　わかりました。ということで、地域の方々とか保護者等が実態に即していないということは言えると思います。ぜひ少しでも100％に、他の先生も100％と思えるような指導をしていただきたいなと、こう思います。

それで、次に学習状況調査でいじめについての設問があるのかどうかわかりません。それで、もしあれば、その実態をあるか、ないか教えてほしいのですけれども、ただ３校の小学校が統合して、地域や校風が違う中で児童は戸惑っていることも考えられないわけでもないと思います。そこで、白老小学校でのいじめはないと思いますけれども、実態を把握していますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　まず、いじめの質問の関係でございます。児童生徒の質問紙の中に、いじめはどんな理由があっても許されないと思いますかと、このような項目がございます。それと、いじめの実態把握につきましては、本町といたしましては定期的な調査物等もありますので、そういった中で把握をし、あればその後どういうふうに対応したかというところまでも押さえております。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　いじめ調査は、まず子供たちがいじめられていると思うかどうかということの質問から行います。その中で、いじめられているという回答があったり、いじめはないという、いろんな答えがあります。学校のほうでも、子供たちがいじめられているという

ような回答したものを受けて、一応学校では認知というふうにいたします。ですから、いじめということでいえばあると思います、それはどこの学校でも。ただ、大事なことは、いじめがあるという実態把握から、次にいじめられている、あるいはいじめている子供との人間関係をどうやって解消していくかということだと思うのです。ですから、町内的に見てもいじめがゼロの学校はありません。全ての学校においていじめはそれぞれ、件数はいろいろありますが、認知しております。ただ、今全ての学校に言えることは、そのいじめは学校において解消されているということでございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　私もそう思います。ただ、地域の方々に耳は澄ませておいてほしいなと、こう思います。私も若干話ありますけれども、それは個別にまた教育長のほうに話ししたいなと思いますけれども、そういうことです。

それで、次に白老町スタンダードについてであります。これも町からいただいた経年経過を見ると、実際に答弁もありましたけれども、23年度の学力スタンダードを入れてから、それは多少はばらつきがあるけれども、平均的には上回ってきているのかなということについては見える。これについては、多少努力については評価しておきたいなと思います。ただ、28年度は余りにもひど過ぎますので、落差が大き過ぎましたので、29年度以降どうなるかということを注視したいなと思います。それで、白老町教育推進基本計画で学校教育の主な施策の重点の一つに、学力向上を目指す白老町スタンダードの実践と深化とあるのです。それで、白老町スタンダードを実現するには、私は超えるべき課題が多々多いと思います。そこで、誰もが実践できる具体的な内容になっていることが望まれます。具体的な部分ありますけれども、そこで聞きたいのは、白老スタンダードの実践と深化の深化とは具体的にどういうようなことなのか、どのような取り組みになって展開されているのか､深化ということが非常にまだ抽象的なので、その辺の取り組み方についてお聞きします。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　本町では、学力向上にかかわるスタンダードというものを各学校、あるいは全ての教職員が共有しております。それで、この内容について実践内容について各学校で交流し合う場を設定しております。ワーキンググループといいますけれども、これを年に２回。そして、さらに中学校区単位で年に３回ほど、またワーキンググループを開催しております。ですから、今前田議員が言われたように、深化という部分はこのスタンダードをつくって、それで終わりではないということなのです。これに基づきながら各学校が実践をして、お互いに情報交流をして、もっとスタンダードを深めていくというか、より肉づけをしていくという意味での深化というふうにご理解をいただければというふうに思います。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　わかりました。それで、その深化の部分も含めて、そうすると現在の教育課程は以前より授業時間が大幅にふえていますよね、そんな中にあって、教師というか、

先生方はこのほかに校務や中学校では部活に追われています。それで、町ではこれからコミュニティ・スクールの導入による小中一貫教育、今議論しています白老町スタンダード、それと教師塾、これの参加もあります。そういうことで、教育現場では、教師自身多忙で長時間勤務の状況のもとで、子供に対して深い学びの指導ができるのかどうかということだと思います。一方で、当然ですけれども、これまで以上に教師の力量が求められています。このような教育環境の中で、白老町の教育課題である、課題というか、目指す、深化させようとしている白老町スタンダードの深化に向けて、学校、教師に負担を強いることなく効果的な取り組みになっているのか。あるいは、そういうことをしなければいけないし、そういうことは可能なのかどうか、その辺について伺います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　今議員ご指摘のように、学校現場においては時間外勤務が非常にふえているということで、時間外勤務をいかに縮減していくかということは、本町のみならず、全道、全国においても大きな課題となっております。教育現場には今さまざまな課題が山積しておりまして、なかなかそこの部分を全て勤務時間内で解消していくというのは難しいのだろうなというふうに思っています。ただ、時間外勤務の縮減に向けては取り組んでいかなければならない大きな課題だというふうに考えております。それで、本町においては、１つにはこういった新しいいろんな施策を実施するに当たって、当然学校のほうにもお願いしなければいけない部分で、新たな活動といいますか、新たな時間が必要になってくるという部分も踏まえて、基本的にはできる限り、スクラップ・アンド・ビルドという考え方がございますけれども、ただ施策をどんどん、どんどん上に積み重ねていくのではなくて、できるだけいろんな教育行政にかかわる中身を整理統合していきたいという一つのスタンスを持っています。

　それから、あともう一つは、今国のほうでチーム学校という考え方がございまして、教職員だけでいろんな課題を解決するのではなくて、多様な人材が学校にかかわっていただいて課題を解決していくと、教職員はできるだけ子供と向き合う時間を確保していくという、そういう動きも今国を中心に出てきておりますので、コミュニティ・スクールも多分そういう意味では非常に大きなきっかけになるかなというふうに思うのですが、できるだけ教職員の負担軽減についてはいつも心を寄せながら教育行政を進めてまいりというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　そろそろ時間ですので、あと２つぐらいで終わりますけれども、今答弁ありまして、ある程度内容的な部分については教育長の思いを感じますけれども、その中で、白老町スタンダードでは生きる力の根幹をなす確かな学力の定着を図るとありますよね。３つの指標を掲げています。そのうちの一つです。そして、この中に、平成29年度学力調査において本町児童生徒の平均正答率が全国の平均正答率を上回ると、こうあります。そこで、学力向上が学力テストの平均点超えが最終目的ではありませんし、ないと思います。そこで、教育委員会や学校では白老町スタンダード、先ほど教育長も話しましたけれども、検証、改善ありますよね。それを行う中で、目標達成に向けてどのような取り組みが行われているのか。わかり

ますよね。ということは、ここです。29年度の学力調査において本町児童生徒の平均正答率が全国の平均正答率を上回ると指標を出していますから、これに向けて今具体的にどのようなことが、スタンダードでは示しているけれども、そうではなくて、28年度悪かったから、より以上にどういうことが、今現実に結果の分析した中で何が行われているのか、そこをお聞きします。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　結論から申し上げますと、29年度に向けてということよりも、常に私どもは、結果として全国平均を上回るということでございまして、子供たちにいかに学習内容を定着させるか、そして子供たちに生きる力を育むかというところを常に目標にしながら取り組んでいるわけでございまして、そういう意味では新たに何かというよりも、今取り組んでいることをいかに徹底して、学力向上というのは一人の教員が取り組んでも点にしかなりませんけれども、学年で取り組めば線になりますし、学校全体で取り組めば面になりますし、町内全体で取り組めばそれが立体になりますので、学力のそういう高さを取り組んでいくために、もう一度原点に常に立ち返りながら、新しいことを何かやるということも含めて、今までの実践をきちんと振り返りながら積み上げていくことが最終的には29年度ということの目標につながっていくのではないかなというふうに理解しております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　最後で終わりますけれども、きょうこの中で全国学力テストの平均正答率を数値化して公表してもらえる、こういう約束されました。それと、今教育長のほうから、白老独自の学力テストをすると、これは非常にいいことだと思います。そういう部分で実りの多い質問、答弁だったのかのかなと、こう思います。そういうことを踏まえて、それらもあわせて、全国学力テストも含めて目標達成の可能性を伺って質問を終わりたいと思います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　可能性という部分では非常にどうなのかということはありますけれども、私どもはよりよい授業を子供たちに提供していくという教育の本来の営みというものに常に着眼しながら、これからも子供たちの学力向上に向けて学校と一体となって取り組んでまいりたいというふうに思います。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　次に、小中学校図書館、図書室の現状と整備充実についてであります。今後の質問については、室を抜かして図書館ということで統一して質問させてもらいます。たまには室使うかもわかりませんけれども。

それで、（１）、各小中学校図書館（室）の蔵書冊数と購入冊数について。

（２）、各小中学校の学校図書館（室）の図書標準に基づく蔵書冊数の達成割合について。

（３）、司書教諭の発令状況と学校司書の配置状況及び指導、活動体制について。

（４）、学校図書館図書整備に対する地方交付税の財政措置額と町の予算措置額、予算化率に

ついて。

（５）、各小中学校の読書活動状況と学校図書館の整備計画についてであります。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

〔教育長　安藤尚志君登壇〕

○教育長（安藤尚志君）　小中学校図書館の現状と整備充実についてのご質問であります。

１項目めの蔵書冊数と購入冊数についてであります。学校図書館の蔵書冊数については、小学校では平成26年度は社台小学校4,072冊、白老小学校5,671冊、緑丘小学校6,786冊、萩野小学校8,549冊、竹浦小学校4,678冊、虎杖小学校4,235冊となっております。３小学校を統合した28年度当初では、統合後の白老小学校で１万972冊、萩野小学校9,179冊、竹浦小学校5,519冊、虎杖小学校4,486冊であります。中学校では、24年度で白老中学校で6,243冊、萩野中学校4,500冊、竹浦中学校3,300冊、虎杖中学校2,362冊であります。３中学校が統合した25年度では、白老中学校6,715冊、白翔中学校7,950冊となっており、27年度では白老中学校6,550冊、白翔中学校7,909冊であります。次に、購入冊数についてでありますが、小学校では26年度、27年度の２年間で社台小学校126冊、白老小学校174冊、緑丘小学校251冊、萩野小学校179冊、竹浦小学校162冊、虎杖小学校175冊であります。中学校では、24年度は白老中学校212冊、萩野中学校143冊、竹浦中学校144冊、虎杖中学校170冊であります。３中学校が統合した25年度から27年度の３年間では、白老中学校499冊、白翔中学校510冊であります。

２項目めの図書標準に基づく蔵書冊数の達成割合についてであります。28年度当初では小学校４校のうち１校が学校図書館図書標準に基づく冊数に達しておらず、達成割合は75％であり、中学校２校においては２校とも標準冊数に達しておらず、小中学校全体で標準冊数達成割合は50％であります。

３項目めの司書教諭の発令状況と学校司書の配置状況及び指導、活動体制についてであります。司書教諭については、学校図書館法で学校図書館の専門的な職務をつかさどるものと位置づけられており、12学級以上の学校に必置となっております。本町においては当該校は白老小学校だけであり、現在１名を発令しております。次に、学校司書の配置状況及び指導、活動体制でありますが、学校司書は現在教育委員会に嘱託職員１名、臨時職員１名、計２名を配置し、各小中学校を週一、二回巡回して図書の管理及び貸し出し業務、教職員の資料提供、児童生徒の読書活動の支援などの活動を行っております。

４項目めの学校図書館の図書整備に対する予算措置額等についてであります。学校図書館に対する地方交付税措置でありますが、基準財政需要額への算入額といたしましては、小学校費で約230万円、中学校費で160万円、合計で390万円となっております。一方、28年度の予算措置額は、小学校費で約89万円、中学校費で48万円、合計では137万円となっております。地方交付税の基準財政需要額算入額に対する予算措置額の割合といたしましては、小学校費で38.7％、中学校費で30％、合計では35.1％となっております。

５項目めの読書活動状況と学校図書館の整備計画についてであります。各小中学校の読書活動につきましては、全ての学校で朝読書の実施やお勧めの本の紹介を行っているほか、小学校では学校司書、図書ボランティアによる読み聞かせなど、読書習慣の定着に取り組んでおりま

す。次に、学校図書館の整備計画でありますが、標準冊数に満たない学校につきましては計画的に冊数の充実に努めてまいります。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　生活環境の変化やメディアの普及などによって、今活字離れとか読書離れが指摘されています。その中にあって、全国学力・学習状況調査で児童生徒の読書についても調査していますよね。読書は好きか、その設問は家や図書館における読書時間についてでありますけれども、この調査結果はどのようになっていますか。

○議長（山本浩平君）　暫時休憩いたします。

休憩　午前１１時３２分

再開　午前１１時３６分

○議長（山本浩平君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　大変失礼いたしました。

学校図書の関係でございますが、本町の小学生の割合で申し上げますと、１日当たりどれぐらいの時間読書をしますかという質問に対しましては、２時間以上と答えた児童が5.5％、それと１時間以上２時間より少ないという子供が15.6、30分以上１時間より少ないと回答した方が11.9、10分以上30分より少ないと回答したのが26.6と、それと10分より少ないと回答した方が16.5、全くしないと回答した方が23.9というような結果になっておりまして、全国平均と比較しましても多少のでこぼこはあるのですけれども、ほぼ全国平均に似たような推移となってございます。

〔「中学校はしていないの」と呼ぶ者あり〕

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　多分あると思いますけれども、いいです。

では、続いて次の質問があるのです。設問されているのです。これ大事なところなのですけれども、本を借りたり読んだりするために学校図書館を利用する割合はどうですかと、こうあるのです。これについて子供たちの学校図書館の利用は、どのような数字になっていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　ただいまのご質問でございます。

まず、小学校なのですけれども、大体週に４回以上と回答された方が4.6、それと週に１回から３回程度行くと回答した方が9.2、それと月に１回から３回程度というのが16.5、年に数回程度行くと回答されたのが33、それとほとんど全く行かないと回答した方が36.7となっております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　全道、全国に比較して聞きたいのですけれども、いいです。多分そこまた大変だと思いますから。

それで、今度逆な形でお聞きします。指導要領においても学校図書館を授業に活用するということになっていますよね。その中で、学力テストの調査で学力向上に向けた取り組み、こういうことで図書館の活用について小中学校に対して調査しているのです。質問しています。その質問というか設問は、学校図書館を活用した授業を行ったかとあります。これ見たら、６つの項目から選択することになっています。そこで、白老町の場合、調査の結果と内容についてはどのようになって、これについて非常に大事だと思いますけれども、この結果についてどのような考察されているか、その点伺います。

○議長（山本浩平君）　暫時休憩いたします。

休憩　午前１１時４０分

再開　午前１１時４２分

○議長（山本浩平君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　たびたび申しわけございません。

まず、前年度までに博物館や科学館、図書館を利用した授業を行いましたかというご質問がございます。この中で、白老町はよく行ったと回答しているのが25、どちらかといえば行ったが50％、それと余り行っていないが25％ということで、全国平均と比較いたしましても本町の場合これは高い数値となってございます。

〔何事か呼ぶ者あり〕

○議長（山本浩平君）　暫時休憩いたします。

休憩　午前１１時４３分

再開　午前１１時４４分

○議長（山本浩平君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それでは、その中から次の質問に移ろうと思ったのですけれども、いいです。

それで、学校図書館の目的は、学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であると、こうなっています。そこで、図書の冊数を満度に充当するということも図書館の整備に入っていますから、そこで具体的に聞くのですけれども、小中学校統合による学校図書の整理、処分についてです。それで、虎杖、竹浦中学校、それと社台、旧白老小学校の蔵書図書の整理はどういうふうに行われたのか伺います。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　小学校、中学校ともに同じ整理の仕方をさせていただいたの

ですけれども、前年度にある程度本を、廃校とする学校のほうにつきましては全て本を引っ越さなければならないということがございますので、そういった中で統合する前年度の年度内において、不用な本というのでしょうか、古い本ですとか、そういったものをまず廃棄をいたします。残った本につきましては、基本的には新しい小学校あるいは中学校のほうに本を移設ということになりますが、その中で重複する本ですとか、あと若干の微調整などを加えて、他の小中学校のほうに振り分けたというような状況でございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　その冊数が先ほど答弁あった冊数に上乗せになっているのかなと、こう思います。そこで、そうすると、私は蔵書冊数の質問しているのですけれども、蔵書冊数をふやすばかりでなくて、今もあったけれども、古い図書の廃棄を適切に行うという図書更新も重要なのです。これらもちゃんと行われているということを前提にした冊数の質問をしていますので、その辺理解してほしいと思います。

そこで、今答弁もありましたけれども、小中学校全体の標準冊数の達成割合は50％と、こう答弁ありました。そうすると、そこを考えて白老小学校の実質蔵書冊数と図書の標準冊数についてお伺いします。今の答弁もありましたけれども、資料も事前に配付いただきましてありがとうございました。それによると、統合直前の３校の合計図書冊数は１万3,241冊です。28年度に開校した開校直前が１万3,241冊。28年度に開校した28年度当初の白老小学校の蔵書冊数は１万972冊です。児童生徒がふえているにもかかわらず、蔵書図書はふえていませんよね。当然図書標準冊数に達していないのです。そこで、聞きますけれども、白老小学校の28年５月１日在籍数で積算した場合に図書標準冊数は何冊になりますか。もしこの冊数で割り返した場合、達成割合は何％になっていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　28年の白老小学校の標準冊数でございます。白老小学校の標準冊数は、普通学級が12学級、それと特別支援学級が７学級で合計19学級、これに基づいて標準冊数を計算するものなのですけれども、それに基づく標準冊数は１万560冊ということでございまして、白小につきましては標準冊数は一応クリアしているというような考え方になっております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それでは、白老小ばかりではなくて、萩野、竹浦、虎杖小についてはどうなっていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　まず、萩野小学校です。萩野小学校につきましては、標準冊数が7,480冊になります、学級数からいきますと。ですので、萩野小学校についても標準冊数はクリアしていると。それと、竹浦小学校です。こちらのほうも学級数からいきますと標準冊数は5,080冊。したがいまして、竹浦小につきましても蔵書数は一応クリアしているという形にな

ります。それで、虎杖小でございます。標準冊数につきましては、普通学級が４、特別支援学級が３ございまして、７学級に対しての標準冊数ということになりまして標準冊数は5,560冊となりますので、現在虎杖小が今年度当初は4,486冊です。ということで、虎杖小だけが標準冊数に達していないという状況でございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　小学校については、ある程度整理されています。問題は中学校です。これは、高校進学等々含めて非常に中学校は重要な時期にあると思います。そこで、同じ質問しますけれども、２校とも標準冊数には達していないということでしたけれども、これも24年度の萩野、竹浦、虎杖中の３校の合計冊数は１万162冊です。だけれども、白翔中学校が開校した25年は7,950冊にとどまっています。そして、28年度当初では7,975冊、開校から３年過ぎても図書は横ばいで、ふえていないのです。これは、大きな問題だと思います。そこで、白老中学校と白翔中学校の、小学校も同じような質問しましたけれども、同じ標準冊数についてはどうなっているか答弁願います。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　中学校の標準冊数でございます。

まず、白老中学校が普通学級６学級、それと特別支援学級が５学級ございますので、11学級に対しての標準冊数ということになりますが、標準冊数は白老中学校が１万160冊に対しまして蔵書冊数が6,736冊ということで、本のほうが明らかに不足しているという状況でございます。それと、白翔中学校でございます。普通学級が６、特別支援学級が３学級で合計９学級に対しての標準冊数ということになりますが、標準冊数につきましては9,040冊に対しまして白翔中学校の蔵書数が7,975冊ということで、こちらのほうも本がこれだけ足りないというふうな状況でございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それで、図書の関係についてはそういう実態です。そうすると、白翔中学校と白老小学校は今まで議論したとおりなのですけれども、そうすると図書室、図書館の施設面積です。これが本当に統合によって児童生徒数、当然本もふえなければいけないと思います。その容量、部屋の容量です。これは実際どういうふうな状況になっていますか。狭隘になっていませんか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　図書室の面積の関係でございます。

教育委員会といたしましては、まず狭隘という部分では白老中学校が狭隘というふうに認識しております。先ほど言った標準冊数をそろえるにしても、恐らく本は全て今の図書室のほうには入らないのではないかということを想定しております。それと、白翔中学校につきましては、当初１階フロアにあったのですけれども、今は３階のほうに移設をしまして、当初多目的の教室が２つありまして、そこを今図書室という形で使っておりますので、そこは面積的には

大丈夫なのかなというふうには考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　次に、学校司書の関係、答弁ありましたけれども、平成26年度に学校図書館法改正されていますよね。答弁とはちょっと違うのだけれども、改正されて、学校には学校司書を配置する努力義務が明示されています。なっています。よって、学校司書の配置経費も財政措置されて、地方交付税で算定されているのです。そこで、算定基準を見るとこうなのです。１週間当たり30時間の担当職員をおおむね２校に１名程度見込んでいますと、こう言っています。この基準に当てはめると、白老町としては何人が配置必要だと思いますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　週30時間でございますので、単純に１日６時間の勤務というような形になるのかなと思います。交付税の算定基準から当てはめますと、各校１名が必要になるというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　最大公約数で各１名、非常にいい答弁だと思いますけれども、実際にはこれからいけば小中６校で３名ほどかなと思いますので、白老からすれば２名ぐらい足りないのかなと思います。学級数や生徒数からいけば、大体３名配置、そして学校図書館法の基準からいけばおおむね２校ですから、ぜひ３校配置しなければいけないと思いますけれども、その辺の考えについてはいかがですか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　学校司書の常勤配置、今２名いるのをさらに１名というような形になると思います。今の現状を踏まえますと、常勤１名をさらに追加するというような対応にはちょっと至らないのかなというふうに考えております。ただ、そういった部分で必要な学校につきましては、例えば巡回回数をふやすというような形で各校のほうに配慮しながら図書館の管理運営といったものに努めてまいりたいなというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ちょっと答弁でも触れていましたけれども、本当に学校司書って私大事だと思います。ここで議論しませんけれども、安藤教育長一番知っています。そうすると、原点を振り返って伺いますけれども、それでは学校司書に求められる資質、能力、役割は何ですか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　学校司書の資質、能力ということでございますが、まずは資質につきましては、司書あるいは司書教諭あるいは教員免許状の資格要件の中から採用するというようなことになってございます。ここは、ある程度市町村によって判断、選択できるようなことになってございます。本町の場合は２名、司書の資格を有している方を採用してござい

ます。そういったことで、各学校の図書の管理運営ですとか、あと子供たちの読書定着といったものに取り組んでいただいているというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　次に、簡単に聞きます。大事な部分なのですけれども、蔵書冊数が不足している中においても図書の選定についてです。図書の選定方法と選定基準については、白老町ではどういう形の中で進められていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　図書の選定につきましては、やはり子供たちのニーズに合った本です。あと古い本ですか、今廃棄の中でも、本町の場合図書館の中には昭和55年以前に発行された本というのがそれなりにまだありますので、そういった本を廃棄した中で新しい本を購入していっているというような状況でございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　時間ありませんけれども、そういうのではなくて、学校司書というのは非常に先生方の授業にも付加する大事なところなのです。そういう部分についての本質的なことを理解しないと、司書の数字ばかりではないのです。先ほどの学校の学力を上げるために必要な非常に大事な部分なのです。ですから、資質、能力、役割、ちゃんと押さえて私の質問に答えないと町長に響かないのです。今２名だけれども、１名増にしなければいけないなと、そういう部分の答弁を求めているのです。聞いているのです。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　学校司書の資質、能力というところからちょっとお答えをしたいと思いますけれども、もちろん学校図書に関する専門的な知識を有することは当然でございますけれども、司書を配置することによって子供の読書がより身近になるというか、図書室へ子供たちが頻繁に足を運ぶようになるということが端的に言えば私は大事なことなのだろうというふうに思っております。あと、町としての選定基準ということでございますけれども、基本的には各学校でそれぞれ必要とする図書の種類というものについては学校のほうで考えていただくことになっております。ただ、町としても例年、年度で春先に札幌のほうで児童図書展示会というのがありまして見本展ございますので、そういったところに学校司書、あるいは学校のほうからもできれば図書担当者に一緒に同行してもらいまして、どういうような本が子供たちにとって必要なのか、あるいはどういう本が出ているのかというような情報収集も含めて対応しているところでございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　私は、選定方法についてそういう部分ありますので、かなり予算の中で厳しい選択をしなければいけないと。ただ、こういうことです。全校児童生徒の興味関心に応える図書、それと授業や学校行事に役立つ図書、それで学校図書は大事なのですけれども、

郷土に関する図書、こういうものをぜひ配備する必要があると思いますので、これらを十分に認識した上で選定をしてほしいし、選定基準に取り入れていただきたいなと、こう思います。答弁はいいです。

それで、時間ありませんので、時間あれば学校開放について、図書室の開放について伺いたかったのですけれども、先に別なほうをやらせてもらいます。学校図書館関係の財政措置であります。これは、国の学校図書館図書整備５カ年計画、今のは28年で終わるのかな、ありますけれども、学校図書館図書標準冊数を整備することを目標に地方交付税措置が講じられています。図書購入費のほかに、学校図書館への新聞配備及び学校図書館担当職員配置、学校司書ですよね、要する経費、これらについても地方交付税措置が講じられているのです。それで、答弁で基準財政需要額の算入額が390万円、このうち28年度の予算措置は137万円とありました。改めて28年度での算入額についてお聞きします。まず、この数字が、390万円がトータル的なのかどうかわかりませんけれども、まず図書購入費の小中学校への交付税算入額と予算措置額、新聞配備費の小中学校への交付税算入額と予算措置、学校図書の配置経費の交付税算入額と予算措置の額、これそれぞれ幾らになっていますか。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　交付税の件でございます。

まず、図書購入費の部分の交付税額につきましては、改めまして今年度の算定でいきますと、小学校が約230万円、中学校が160万円の合計390万円ほどということになります。それと、学校新聞の交付税措置につきましては、小学校で約21万円、中学校で10万円、合計約31万円という算定になっております。それと、学校司書に関する交付税でございますが、小学校で約280万円、それと中学校で146万円で合計約426万円となってございます。

〔何事か呼ぶ者あり〕

○議長（山本浩平君）　答弁漏れあります。

岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　済みません。

予算措置額でございます。まず、学校司書のほうが嘱託職員で約150万円ぐらい、それと臨時職員が120万円ぐらいで、約270万円ほどということになります。それと、学校新聞です。済みません。これについては押さえておりませんので、後ほど答弁させていただきたいと思います。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　教育長、新聞配備がなぜ交付税されているか、その部分について教育の中で取り入れてやりましょうと、こうなっていますよね。その辺の関係についてちょっと答弁願います。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　新聞を活用した授業はＮＩＥというような授業で言われていますけれども、一般的に今子供たちに考える力、先ほどの学力調査でいえばＢ型というふうになるのですけれども、子供たちに考える力をつけるという一つの手法として新聞を活用した授業とい

うのが注目をされているところでございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　各小中学校で実際に授業に取り入れてやっている学校はありますか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　授業の中で新聞を使うというのは、意外と難しいことなのです。ふだんの授業は基本的には教科書が中心になりますので、授業で使うということになると補助的な資料ということでございます。ですから、授業としては、例えば道徳の時間の資料であったり、社会科の時間の資料であったり、そういった資料として使う場面が多いのかなと。また、萩野小学校においては、学校全体で新聞記事を使いながら子供たちの家庭学習に取り組ませているというような実践もございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　それで、地方交付税は標準的な水準の行政を行うために必要となる基準財政需要額と標準的な財政収入の差額を使途の制限なく交付されますよね、これ一般財源化されています。そういうことを承知の上で質問しますけれども、白老町の小中学校に合わせた学校図書館の蔵書冊数は、答弁もありましたけれども、標準冊数の達成率が50％ですよね。地方交付税算入額に対する予算措置の割合が35.1％です。そして、具体的に言うと、大事な学校司書が426万円算定で入ってきているのが270万円しか使っていないのです。これ満度に使えばもう一名ふやせるのです。その辺も十分考慮してほしいと思うのですけれども、そういうことで図書整備が十分でない状況にあって、地方交付税措置に満たない予算額となっていますけれども、算入額というか、に満たない予算措置となっていますけれども、これについて教育委員会としてこれらを踏まえてどういうような予算要求しているのか。それと、今の議論している中で、町長は予算編成でこの件についてどのような方向性を示しているのか、その辺を伺います。

○議長（山本浩平君）　岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　まず、町教委としての予算要求をどのようになされているのかということでございます。

今現在来年度の予算編成作業中でございまして、学校教育課といたしましても来年度の図書購入費については予算要求をしている状況でございます。内容につきましてはあれなのですけれども、端的に申し上げますと増額要求はさせていただいております。

以上です。

○議長（山本浩平君）　大黒財政課長。

○財政課長（大黒克巳君）　町側の立場といたしましてお答えいたします。

予算編成につきましては、各課から予算要求が上がってきて、それを最終的に予想される財源の中でどう組み立てていくのかというところが予算編成になります。今回学校図書館の図書整備に当たりまして、このような議論の中で実際は交付税算定の額よりも満たない状況だとい

う部分は認識してございます。ただ、あくまでも一般財源化という中で、全体の経費、それぞれ必要な経費ございますので、その中でどこを重点的にやるかという部分はこれからの予算編成にかかってくるかなというふうに思います。今回教育委員会の中でも、逆に図書整備について強力に要求するということがあれば、それを踏まえて全体の中で議論させていただきたいというふうに考えてございます。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　ということで、地方交付税の算入額が図書整備以外に使われているということを言っても過言ではないと思います。議論はあると思いますけれども、実際そうです。そこで、財政再建まだ道中ではありますけれども、財政が好転しているとして年明け早々に財政健全化プランが見直されます。町長、これは財政好転の果実を子供たちのために使いませんか、私はそう思います。交付税算入額を学校図書館の拡充に回して予算化できるのは、町長の判断によるのです。学校図書蔵書の慢性的な冊数不足、さらに図書標準冊数を充足していない現状に鑑み、学校司書もそうです。学校図書館整備のためにまずは地方交付税措置額、算入額を次年度から予算措置すべきではないでしょうか。先ほど財政課長から若干前向きな答弁ありましたけれども、財政を扱っている、財布を持っている副町長、どう思いますか。

○議長（山本浩平君）　古俣副町長。

○副町長（古俣博之君）　これまでるる学校図書館関係につきましての議論をさせていただきました。そういう中で、十分学校教育の中における図書館環境というのは私自身も経験上非常に大事にしなければならないというふうな認識に立っております。その中で、交付税の算入のあり方については、一般財源化というふうなところでありますから、その中で、先ほど財政課長のほうからもありましたように、どこに重点的に充てていくか、そこのところはさまざまな考え方があるだろうと思っております。学校図書館としての整備がいろんな活用の仕方もあるし、効果もある。そういう中で、本町においてそれが子供たちにとって最大の効果を上げるだとか、最大の子供たちの声の反映だとか、そういうふうなことであるならば、それは算入のことがあるわけですから、そこにつけていくのはやぶさかでないというか、本来的な部分でなってくるだろうと思います。ただ、全体的にいえば、学校教育の中で図書館整備イコール学校教育ということにはなっていかないのです。もっと違った部分での予算の活用の仕方というか、今学校の中で何が本来的な必要なことなのか、そこのところは教育委員会と財政部局とのきちっとした意思疎通を含めて今後しっかりと、やっぱり子供たち、次代を担う子供たちにしっかりした教育をさせていかなくてはならないということが底辺ですから、基本ですから、そこのところはしっかり押さえながら今後の予算措置はしていきたいと思っています。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　教育に係る全体施策にどういう予算を配分するか、これについて議論しようと思いましたけれども、古俣副町長の言うとおりです。私は、全体的にはそういうことを踏まえています。だけれども、今回は学校図書館整備という部分に絞って議論していますの

で、財政好転したと言って、今副町長は満遍なく行政があると言いますけれども、１つとして、やはり財政の好転していると言っているのですから、果実を子供たちのために少しでも使ってほしいと、こういうことです。

それで、今までの議論を踏まえて教育委員会にちょっと提案しますけれども、学校図書館の整備方針についてです。もしあれば、あったでいいのですけれども、図書標準冊数の達成、学校司書の増員、図書館の施設整備について論じてきました。国の定める図書標準冊数は、相当低い達成率になっています。そして、地方交付税の算入額の予算化は35％に過ぎません。学校図書館は、学校教育の中核ですよね。そこを忘れてはいけないと思います。学校教育の中核だと、そして重要な役割を果たしていると、こう言わざるを得ないと思います。そのために、学校図書館の本来の役割、重要さからも、計画的な条件整備を進めていく必要があります。実行予算を担保する意味からも、学校図書館等整備方針を私はつくるべきだと思います。あればあったで言ってください、どういうことになっているか。そして、新年早々見直される財政健全化プランとの整合性を図り、学校図書館の整備を年次計画で確実に実施していくためにも、学校図書等整備方針をつくって、財政健全化プランから財源を担保してもらうと、そういう部分を考える学校図書館等の整備方針というのをつくられたらいかがでしょうか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　ただいま貴重なご提言をいただきまして、ありがとうございました。学校教育全体における図書館ということの位置づけの問題もあると思うのですけれども、私としてはこのことだけということよりも、町長部局のほうと協議する場の中で教育大綱にかかわる場もございますので、ぜひそういう中で具体的なお話をしながら、読書環境の整備に取り組んでまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　そうすると、図書館整備等を含めた具体的な学校図書館の整備方針というのはつくらなくてもいいという考えですか。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　整備計画が不必要だと、必要ないということではございません。ただ、具体的に今置かれている状況も踏まえながら、広く教育という領域の中で、学校図書館だけではなくて、例えばこれからはＩＣＴの充実もかなり必要になってまいります。そういったときに、図書館という一つの窓口だけで見るのではなくて、学校教育全体でこれから求められる課題も踏まえながら、そしてその中でより具体的に学校図書館のあり方については考えていきたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　13番、前田博之議員。

〔13番　前田博之君登壇〕

○13番（前田博之君）　最後の質問にします。

文部科学省は、ご存じだと思いますけれども、子供たちの確かな学力や豊かな人間性を育むため、学校図書館の整備充実にともに努めましょうと言っているのです。ということで、学校

図書館の整備充実を地方自治体に喚起しているのです。そこで、何回も言いますけれども、図書館は学校教育の中核です。よって、たとえ財源が限られていても、焦点絞って言いますからね、図書館、図書室が子供たちの際限のない知識欲を満たす場所、創造を育てる場所として、子供たちの未来のために学校図書館整備を見える化して前に進めていきませんか、いかがですか。

○議長（山本浩平君）　その前に答弁漏れはできますか、先にそちらのほう。

岩本学校教育課長。

○学校教育課長（岩本寿彦君）　大変申しわけありません。先ほど答弁漏れの２点につきまして答弁させていただきます。

まず、新聞の予算額につきましては、小学校のほうで１万8,000円、それと中学校のほうでは３万6,000円で、合計５万4,000円となります。

それと、質問の関係の図書館資料を活用した授業を計画的に行いましたかという質問でございます。週に１回程度またはそれ以上行ったというのが25％、それと月に数回程度行ったというのが同じく25％、それと学期に数回程度行ったというのが25％、それと年に数回程度行ったというのがこれも25％ということになってございます。全国平均と比較しますと、１回程度またはそれ以上行ったというのは高いのですけれども、月に数回あるいは学期に数回程度といった部分では全国平均を下回っているというような結果となっております。

○議長（山本浩平君）　安藤教育長。

○教育長（安藤尚志君）　きょう議員のほうからは、図書のあり方や、あるいは学校図書館のあり方について大変多くのご指摘をいただいたなというふうに考えております。図書館が子供たちにとって本当に学びの場であり、夢を育む場として機能していくように、その重要性を十分認識しながら町内の子供たちのために整備に取り組んでまいりたいというふうに考えております。

○議長（山本浩平君）　以上で13番、前田博之議員の一般質問を終了いたします。